

モーフラント

狼狽した喧嘩に虫を告げた。

1 ほしゆに

金田の事実語る。政府過失がナショナル反動的組織を

許さず、國の徹底的民主的改革をめざすとする事いは、ワ

日上旬に至り一大騒ぎを迎へるのである。即ち終評自ら組により造成された「ナショナル反動的組織を粉碎する共謀説」(のべのことを)が一般にブートの腹にわたる統一行動に更へて、一方、ナスも圧倒的に引ぬいた沖縄農民全員の抗争の裏で、25.7月でミストヘと前進して

うといひしる。我々の大學問題の根柢は早期より日本独

占領本の帝國主義的經濟制度に屬し、その意味で

何が問題内に生じたかと見るにとどく、一過、安保に争

争の場に見せ金田洋介翁の反合理化工口の斗争と

有志的活動を追求し、4.18.4.28と傍聴者と聞く連

帶じて斗つ来た。これがの斗争の潮流の中で年斗争の

勝利的展開の道である。當國の争を敵兵的斗争の抜力

及保衛といふとしうが我々の根本的の觀念である。現

在の年斗争の陣地の主に我々が起しての同性

にとどまつて居た。今我々の主張は、あらう

べのうども、はじめて、斗争的確立のうで金田

の辯ひ者。當國の争や、徹底的斗争に前進する」と

に他ならぬ。この暴力事件に屈する、ハムハム

の體戦の可能になつて秉てゐる。つきづきの京

大、阪大、電大等への杜撰な警備に見る様に、御の犯

罪的役割は、この下に現出され、一方彼らは日本

シナ商と争ひ西洋ひのうとした内閣を、今や独裁本

自身を石ころのうこじりのうと見えるのである。御の

詮理を多くの形化してゐるとみわかるばかりで

ある。以下昨日の民衆のビラに眞体的に答へ、彼らの

獨裁思想 在裏日本主義を繰り、彼らを東洋へ送り

つ賣毛を終一としたい。

2 ライツは趙正曲によるレジナルド
張りに返口に入る

彼らの批判は、「商業用紙と批判に対する論理的反論をひらく、我々の文章のうち通り所を多くし、都合の良い所だけ論文中引用し、成果をコソソリ横取りしておけば、さうしては、その結果を正当化する窮屈手段にするやうなり。

彼らの批判の一題は、我々が「金共シ」を何の組織

じよ民主的改革権利をもつてゐておる。」といふことである。では彼らに尋ねるうておれば、金共シの貢

に糾弾のうじゆうにうつとるのみ。されば、「全

共斗組織」と言えはそれでもいいのを、決してそれで

はあり。つまり暴力問題を例にとつて見てみると、重要なのは、暴力を許さんとする態度を如何にひびくか、と

いうことであり、その時、暴力(封鎖)はある限り向

こうなることとして、重更上「暴力反対」として重要なのは、暴力を許さんとする態度を如何にひびくか、と

いうことである。つまりをは倒さる新しく運動を確立する

ことは、暴力を許さんとする態度を如何にひびくか、と

争うる道は、彼らをは倒さる新しく運動を確立する

ことは、暴力の目的意識的想起と保有する政策を廢止する

ことである。この意味で、改革斗争の前進こそ最重要

のである。この観念の下著の結局、改革を正常化の

彼岸に用ひたり、その杜撰的分析と學友の目的意識的要

を正常化の上に、正常化の力加勢の日常的道徳的要

走に走める以外にないべからぬのだ。そして空襲的にはシ

争を、玉鋼を百ひのを元に押こ止め、庄子の「国际

内にシテの膠着化を現度させこいる。」一つ、集会につ

りこ付記するが、我々は「香港の効率に、おわり

のことは、コンソルトに出席して「全商連支店

会議の上、最もよく知つておるはである。この

間、集会は勿論、団体の一つと組合のえらい彼らと、

学部興をめぐつておさだらけに事性を外さら云々で

て居るの如きを其の上に書かれている。

（彼の口音）我々が「金兵三」一員として甘い幻想を抱っこいる」と言つこりる。二の問題は6-14の要

民青の現状維持路線

の一番にあります。たゞ、正書諸君はヘルメント博士と
生と講義をなめたり絶対に参加しないとして、先生との
ぐつて教養を内面に混乱を与へ、6・14抗争の志氣を
もじりとじるゝ事である。つまり「左共シテ自民党的の半
失」を示す上ある立場に立たれてゐてゐるのである。
何故に左共産連合の起りの萬能的貢献をオ一に評価し
これを國に前進させるべく大胆に参画するに至らない
ので、一についに運動の複雑化による其の延長化をせ
しものである。一言でいふなら、運動全体の利害に自
らの党派的利害を優先させる所で左共の所以であ
る。

とらしく語つこじる。こんなことの自明の前提があり、これだけを言つてはこの何と言つてないのか同様である。我々は、如何にして自己組織の強化が可能なるかを問題としているのであり、そのために、(1)具体的な手筋(へきせん)(2)政策(政策とストーナン)を必要のごあつこそ以てして何事(へんじ)とを語りつゝとそれによじて(ヤシ)を漏(も)す精神主義を培養(へいよう)していくに他ならぬ。全体的に見て、ひとと云ふ、彼ら(かれ)の手筋(へきせん)を何故我々に教(おし)へて言つ時は正面に出してほりそり事であつた。